

1年間、毎週2時間の 実習体験を将来に生きる 経験に変える「やかげ学」

第8回 矢掛高校(岡山・県立)

取材・文／江森真矢子



毎週木曜日の昼休みが終わるころ、矢掛高校からは自転車に乗った生徒が次々と出てくる。ブルーの体操服あるいは制服で、昇降口に立つ教員と言葉を交わしてから出かけてゆく「出勤」姿はこの6年で矢掛の町に馴染みの風景となった。

町内の施設に到着すると、生徒たちは慣れた様子で「業務」に取り掛かる。図書館では本を配架し、カウンタ―で接客、老人福祉センターでは一緒に健康体操。保育園ではお昼寝時間中に会議をする先生に替わって園児を見守る。お兄さんお姉さんは小学校でも大人気だ。ある小学校では、授業の補助などその日の仕事が終わると、校長室で振り返りの場をもつのが恒例となっている。帰校後、業務報告書を作成し、担当教員と面談して一日が終了する。

「体験報告」から「提案」へ

2年生の8月から3年生の7月まで、毎週木曜の5・6限、1年間の実習を伴う「やかげ学」は矢掛高校の学校設定教科。現在の実習先は小学校7校、保育園2園、高齢者福祉施設2か所、郷土美術館、図書館、自然体験施設の14か所。ここに普通科総合コースの2クラスの生徒が通っている。旧矢掛商業高校と旧矢掛高校が合併し2004年に誕生した新しい矢掛高校は、他に国立進学希望者のための普通科探究コースと、商業

やかげ学の2年間

目標

地域との連携を重視した様々な形態の学習活動を通して、他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、「かかわり」「つながり」を尊重する態度を養う。また社会に積極的に関与する能力を育成し、持続可能な社会が実現できるような価値観と態度を養う

Ⅱ 実習期間 2学年8月～3学年7月

木曜の5・6限に町内の各施設で実習を行う。毎回報告書を書き、教科担当者に報告をして終了となる。12月には体験の内容・今後の課題とその解決策などをまとめて中間発表。



小学校で授業補助



「出勤」時の風景。補助金も活用して購入したやかげ学用の自転車が駐輪場に並ぶ



自ら企画して授業をした生徒も



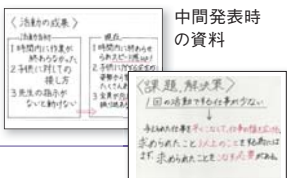
図書館勤務中



毎回の面談。振り返りの内容が不十分だと突き返されることもある



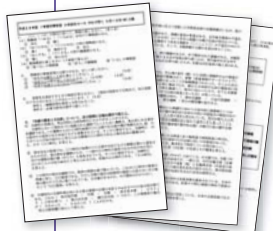
業務報告書はA4表裏に「本時の活動目標」「活動内容」「特に頑張ったこと」「反省事項」「今後活かそうなこと」などを書く



中間発表時の資料

Ⅰ 準備期間 2学年4月～7月

矢掛町の歴史文化や経済など、町を知ることから始め、施設の希望調査や、マナー講習、自己紹介カードの用意など実習に向けて準備を行う



毎回のワークシートで2年間のポートフォリオはかなりの厚みになる



役場担当者など外部講師による授業も多い。中間・期末考査では座学で学んだ内容を問う

Ⅲ 振り返り・発表期間 3学年8月～2月

これから実習に入る2年生への引継ぎを行い、時間をかけて振り返り発表会へ



町内の公共施設で週1回の実習を行う「やかげ学」。「町の人に育ててもらおう」ともりてスタートした取り組みは7年目をむかえ、今、生徒たちは「町になくしてはならない」存在として活躍しています。



左から
高木潤先生(総務課長・地域連携係)、宮地伸幸先生(やかげ学主任)、濱田好宏先生(教務課長)、関戸章宏先生(教頭)

「やかげ学」構想段階での12の仮説

生活指導に役立つ	<ul style="list-style-type: none"> ① 服装、頭髪や言葉遣いなどの校則やマナーが、社会でなぜ重要かを実感できる。 ② やかげ学の時だけでなく学校生活全般でも、自然にそれらに注意を払うようになる。 ③ 地域から見られる意識が高まり、校外でのマナーが良くなり、地域からの信頼を厚くすることができる。 ④ 仕事に対する責任感が育つので、校内の清掃など諸活動への取組も変わる。 ⑤ 地域の方々に学ばせてもらうことで、感謝の気持ちや問題意識を持って地域貢献活動に参加するようになる。
進路指導に役立つ	<ul style="list-style-type: none"> ⑥ 自分の進路と一致する施設に行った生徒は、100時間の実習によって専門的な体験と問題意識を得ることができる。 ⑦ 実習施設と進路が一致しなくても、普遍的な対人関係や問題解決の経験を通して進路への動機付けを強めることができる。 ⑧ 基本的な職業観が養われるので、総合的な学習の時間の内容を補強することになる。 ⑨ はきはきと話したり、考えたことを正確に伝えるなど、基本的な対人関係の力が鍛えられるので、推薦AO入試などに役立つ。 ⑩ 指導者は推薦・AO入試の指導の際に、これらの能力を引き出す工夫が必要となる。
教科指導に役立つ	<ul style="list-style-type: none"> ⑪ 社会で働くためには様々な知識が必要であることを感じ、教科学習、社会常識や言語能力育成の強い動機付けになる。 ⑫ やかげ学で進路を達成しようとする意識が高まり、学習意欲が高まり、授業態度のさらなる向上が期待できる。

科目を中心に学ぶ地域ビジネス科がある。最も人数が多く多様な生徒の集まる総合コースに大きな教育の柱を立てるべく、06年より検討され10年からスタートした「やかげ学」は、旧商業高校と地域との強いつながりを引き継ぎ、生徒を地域に育ててもらおうという主旨で構想された。

当初から実習期間は1年間。地域に出すためにまず座学で学び、1年間の実習が終わると発表会に向けての振り返り・考察を行い、最後は2年間の総まとめという内容だ(下図)。

職場体験でもボランティアでもなく、継続して一つの職場に約30回、100時間通うことで得られる成長はなにか。構想段階で立てていた仮説がある(左図)。始めてみると生徒指導、進路指導、教科指導に役立つという仮説はすべて実証されたのみならず、予想以上の成果が生まれた。

「いろんな奇跡があるんです」と先生方は言う。「なぜここまでしてくれるのかと思うぐらい、地域の方々が生徒に愛情を注いでくれる。成長させるために業務内容を工夫したり、わざと失敗させたり」。その思いに応えるように生徒たちは責任感や自信、社会人としての力を培っていった。

老人福祉センターの「お達者教室」企画を任された生徒たちが自主的に何度もミーティングをする姿が見られた。介護職員を希望していた生徒が施設に通ううち、仕組みを整える行政職員になりたいと思うようになり公立大学に進学した。自分の情熱を伝えたい生徒が、小学校で字を丁寧に書くことや文字の大切さについて、得意の書道を生かして授業をした。80人いれば80通りの成長がある。

徹底した内省が成長を生む

予想外の成果の一つに、生徒たちが自分のことだけでなく地域課題について考え、提案をするようになったことがある。行政、教育、福祉系への進学者も増えた。もう一つは「やかげ学」に触れた小学生が矢掛高校を志望するようになったことだ。大学卒業後、町内に戻って就職したり、小学校で実習した生徒が高卒で学校事務職員になるなど、地域内での教育の循環が起り始めている。

これら生徒の成長を促す仕掛けは、実習外での教員の関わりや座学にある。礼儀作法、働くことの意味、座学の定着を促す定期考査、3年生から2年生への業務の引継ぎ、ディベート・ディスカッションや発表の機会。毎回の報告書提出時の面談では、目標に対する成果や、具体的な場面でどう考えどう行動したのかを問われる。

面談で「なぜ? どうして? いかん?」と問う教員との問答で、内省の力や論理力も育まれていく。12月に行われるやかげ学発表会で、昨年、「僕はコミュニケーション能力が身に付いたかどうかはわからない、でも、コミュニケーションが大切だということはよくわかった」と深い内省を伝える生徒がいた。そして「次はどうする?」と

問われてきた生徒の発表は、報告だけでなく考察や提案の含まれるものに変わってきた。

今では「矢高生がいなければ仕事が回らない」と言われるぐらい町の運営の一部となった「やかげ学」。先進的な取り組みには視察者が絶えず、地方創生における教育の役割に注目が集まる中、自治体と学校が一緒に来校することもある。そんな時、矢掛高校から伝えるのはこの信念だ。「地域課題解決のため、という発想が先にあつてはいけません。学校の教育活動は生徒の成長のためにあるんです」。ダイナミックな地域連携が目と目、ひくが、周囲の課題を自分の課題として捉え立ち向かう力は、一人ひとりと向き合う指導で育まれている。

スケジュール

	2年生	3年生
4月	座学(11回)	実習(12回)
5月	やかげ学とは/マナー/町の行政/町の歴史と文化/中間考査/町の観光/町の農業/町の福祉/まとめ/施設選択の説明/期末考査	
6月		
7月	自己紹介カード(2回)	
8月	3年生から2年生への引継ぎ(3回)	
	施設打ち合せ	振り返り(6回) 礼状書き等
9月	実習(13回)	発表準備(11回)
10月		
11月		
12月	やかげ学発表会	
	中間報告会準備/中間報告会	
1月	実習(5回)	2年間のまとめ(7回)
2月		
3月		

School Data

1901年創立/普通科、地域ビジネス科/生徒数423人(男子191人、女子232人)/進路状況(2015年度) 大学・短大67人うち国立大25人、専門学校36人、就職26人、その他2人/ユネスコスクール加盟校